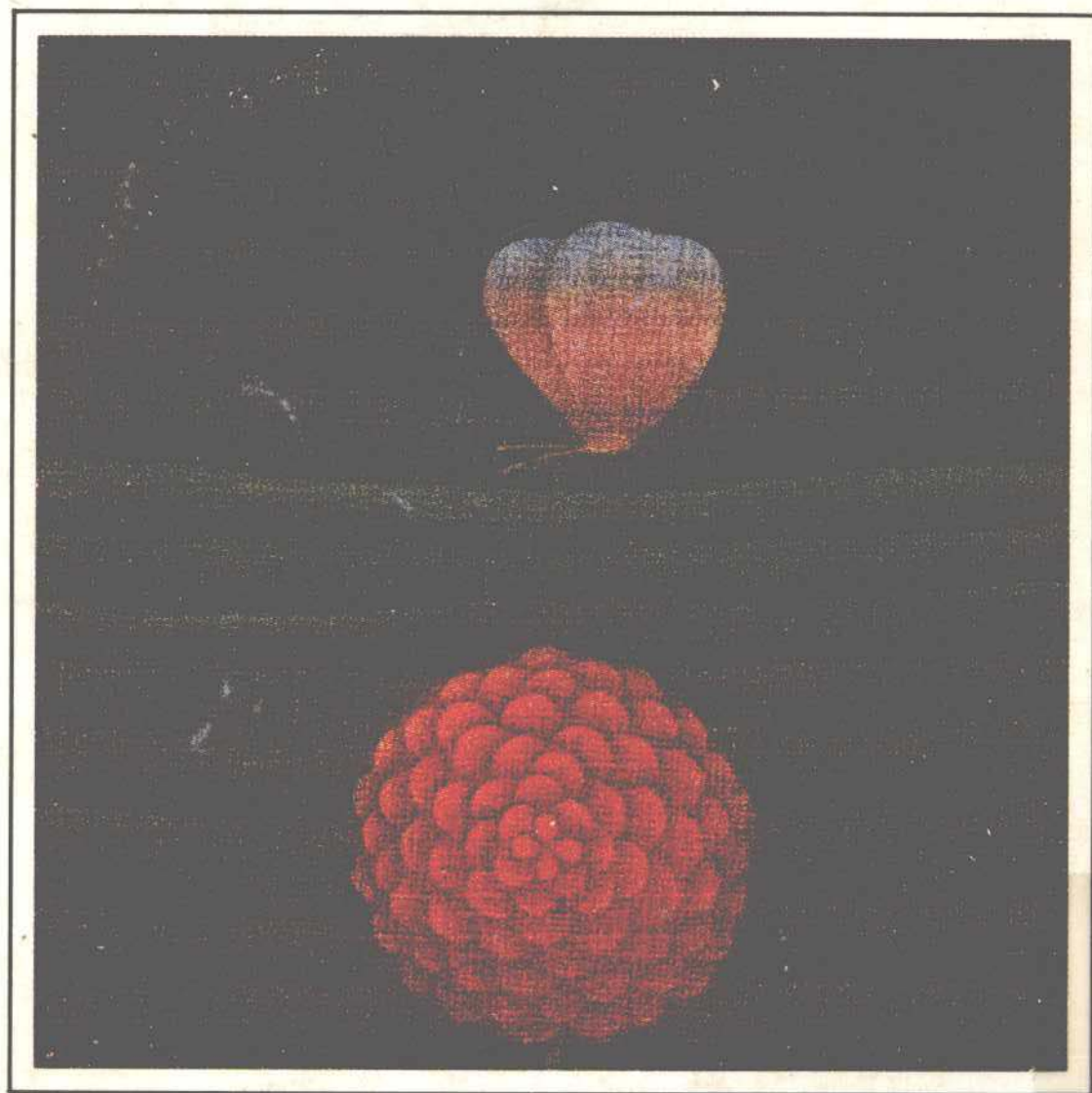


論人生をめぐる愛

秋正原立



新潮文庫



あい じんせいろん
愛をめぐる人生論

定 価 220 円

新潮文庫 草 95 F

昭和五十二年十一月三十日 発行
昭和五十六年九月五日 十一刷

著 者
立 原 正 秋

発 行 者
佐 藤 亮 一

発 行 所
株式 新 潮 社

郵便 番 号 一 六 二
東京 都 新 宿 区 矢 来 町 七 一
電 話 業 務 部 (〇三)(二六六)五一一
編 集 部 (〇三)(二六六)五四四〇
振 替 東 京 四 一 八 〇 八 番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

◎ 印刷・二光印刷株式会社 製本・株式会社植木製本所

© Mitsuyo Tachihara 1977 Printed in Japan

新潮文庫

愛をめぐる人生論

立原正秋 著

新潮社版

2434

目次

一	秘めた多言	七
二	嫉妬のかたち	二三
三	純粹結晶	三九
四	萎れし花	五五
五	人妻の恋	七一
六	貞操について	八七
七	妻というもの	一〇三
八	かけひき	一二九

九	色と匂い……………	一三五
十	大人の恋愛……………	一五一
十一	哀れについて……………	一六七
十二	流れについて……………	一八五

解説 吉田知子

愛をめぐる人生論

一
秘めた多言

へ愛をめぐる人生論」などと題がすこし大袈裟だが、正面きつたものではない。気軽に、睡眠薬がわりに読んで戴きたい。私の書く小説が、愛のかたちの主題と変奏曲であると仮定するなら、この感想文は間奏曲である。文字通りインテルメッツォと解してもらってよい。

さて、私はいくつか項目をわけてみた。プラトニック・ラブ、嫉妬のかたち、人妻の恋、貞操について、という風に。そして、なにか書きだそうか、と迷っているうちに日が過ぎて行った。その間、京都に紅葉をほめに行ったり、伊賀上野に番傘を見にでかけたり、大分県の国東半島に仏像を鑑賞に飛んだりした。それでも書きだす項目がきまらず、すこぶる困った状態になってしまった。たとえばこれがヨーロッパならトリスタンの神話から書きはじめ、エロスとアガペについて述べ、トルバドゥールとカタリ派について綴れば、それだけで数回分の原稿が出来るだろう。だが残念ながらわれわれはトリスタン神話のようなかたちを歴史にもっていない。かつてフランスの詩人ジャン・コクトーは、トリスタンとイゾー物語を、現代風にして「悲恋」という映画をつくったことがあるが、トリスタン神話とは、永劫回帰の愛と死の神秘の物語である。

私は、むかし、その日の米に困る朝夕を送りながら、酒と喧嘩けんかにあけくれた時代があったが、それらの日々、読んだ本のなかに歌論書がいくつかある。そんなところから話をすすめてみようか。

歌論書のなかで〈御鳥羽院口伝ごとばいんくでん〉はわけでも好みにあい、たとえばつぎの一節などは諳んそらじているほどである。

或はうるはしくたけある姿あり、或はやさしく艶えんなるあり、或は風情ふぜいをむねとするあり、或は姿を先とせるあり。これによりて心をのぶればすなはち詞ことばつきず……

また鴨長明かものもちようめいの〈無名抄むなななしょう〉からはつぎの一節をぬきだしてくることが出来る。

よき女の恨めしき事あれど、言葉には現さず深く忍びたる気色を、「さよ」などほのぼの見つけたるは、言葉を尽して恨み、袖を絞しぼりて見せんよりも、心苦しう哀深あわれかるべきがごとし

もちろん私は後年これらの論を小説作法に応用し展開していったが、現実にもこうした女にはかなり出あつてきている。といつても、東京のような大都会では、そのたたずまいがそのまま秘めた多言を表現している、といった女にはもう出あえなくなつてきている。こんなことを述べる

と自分の作品の裏側をさらけださねばならないが、ある程度はやむを得ないだろう。

ところで、十九世紀後半にアメリカを中心に発達してきたプラグマティズムの思想が、ひとつの教育体系として日本に入ってきたのは戦後であった。たしか戦前にも進歩主義教育と称されて一部には入ってきていたと思うが、日本の教育界に決定的な影響をあたえたのはやはり戦後である。プラグマティズムの教育とはなにか、アメリカの哲学者デューイのことをここにすこし書かねばならない。ことわっておくが私には哲学などという難しい学問はわからない。ただ戦後数年して六・三・三・四制の制度を目前にし、日本の伝統をここまで毀^{こわ}してしまったプラグマティズムの教育とは如何なるものか、とすこしばかり興味をおぼえ、デューイに関する著作をかじっただけである。もしヨーロッパの哲学を主知主義とすれば、これはあきらかに理論哲学である。ところがデューイが唱えたのは応用哲学であった。彼にとつては真、善、美は目的価値とはならず、それを実現するための手段価値にすぎない。一種の概念道具説である。彼は、知ることを科学に結びつけ、こんどはその科学を技術に結びつけた。こうしなければ知識は生かされない、とこれはまったくの合理主義で、実験的知力を社会全般に応用した。

では、このプラグマティズムは教育にどのように応用されたか。戦後の日本の教育をふりかえってみると、簡単にいうと、行為からはなれた思考は存在しない、というのが新しい教育理念であった。もっと簡単にいうと、この場合、われわれの文化遺産はまったく問題になり得ない。そんなものを教育課程に組み入れるよりも、重要なのは子供の生活経験である。生活経験からくる

自発性、これが学習の根底となる。PTAがうまれたのはこうした場があったからにほかならない。子供の生活経験を能動的に改めて行き、そのために学校はその改造の場にすぎない。考えようによっては、この精神は、それまでの形式主義、権威主義を批判したことになるが、しかし、歴史的に定着したわれわれの文化遺産は、この場合どうなるのか、といった疑問が出てくる。われわれの文化遺産はすでに客体化されている。客体化されたものを彼等は認めまいとした。アメリカには伝統がない。伝統がない以上過去もない。要は現実の経験にのっとった合理主義だけである。「思想の科学」というプラグマティズムを奉じた思想団体があり、彼等は日本のあらゆるかたちを科学的に分析した。そしてなにが残ったかという、たとえば大学の国文科を出ながら古典が読めず、古典を文法的に解釈するちからだけがついた、といった不具の卒業生がうまれたのである。一例をあげよう。彼等プラグマティズムの徒が、われわれの古典、たとえば私の好きなへかげろふの日記をどのよう解釈したか。

格助 下二、体 に みる 人 あり けり。	副 ラ、用 過、体 上二、用 接助 かくあり し 時すぎて、世の中に いともものはかなく、 ともかくにも つかで、世
	格助 副 (接頭)形、用 副 四、未接(消)

大学の入試に出題されるだけでなく、高校の国文でも、このように古文を文法的にことまかに分析した問題を教えている。このような様々な事があつた青春時代もすぎ去って、たいそう頼りなく、どっちつかずの情態で、夫婦生活をつづけている人があつた、といった大意とこの文法の分析とは、それほどかわりはない。万人が文法学者になるわけではない。

われわれの秘めた多言は、まず、こうした教育法から姿を消していったのである。もうひとつ、〈古今集〉をひらき、任意の一首をえらびだしてみよう。

花の色はうつりにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに

小野小町の歌である。これを、

花格助(連)の係助色はうつりに四、用完、用過(詠)、終終助(詠)けりな

という風に文法的にことまかに分析したらどういうことになるか。

多くの言葉を胸に秘しておく、こうした美しいかたちが滅んで行く。世阿弥ぜあみは「風姿花伝」の

なかで、

秘すれば花、秘せねば花なるべからず。

言多め秘

と述べた。私が能楽をとり歌舞伎に興味を示さないのは、能が極度に圧縮された形式だからである。同じ古典芸能でありながら、歌舞伎は饒舌にすぎる。あそこには秘めた華やかさはない。あれはあくまでも表面だけの華やかさに過ぎない。能、茶、花、香には言葉がすくないが、浄瑠璃、歌舞伎、近世に発達した舞踊、寄席などは、なんとも言葉が多すぎる。思うに、近世における庶民の饒舌が、これら饒舌な芸能の形式をうんだのだろう。もっとも当世の茶や花は、創始期の精神からはなれ、なんとも俗なかたちになりさがっているが。したがって茶、花、香の寄合芸能の真の姿は、今日ではもう望むべくもない。今日、茶と花は金儲けの手段にしかすぎない。

私は秘めた多言が消えて行くのをなげきながらも、ブラグマティズムの定着をなげいているわけではない。功罪のうち功も認めなければならぬ。近世の上方商人などは、ある意味では日本的なブラグマティズムを実践した人達ではなかったかと思う。しかし、大学の国文科で、こまかく切り刻んだ古典を学んだ女子学生の身の上に思いをいたすと、やはりなげかざるを得ない。由

来、秘めた多言は家庭の、とりわけ母親が教育したものであった。そこに教科書があったわけではない。

さきに述べた国東半島に仏像をみに行つたとき、私は湯布院ゆふいんの亀の井別荘という宿に一泊した。このあるじは中谷健太郎氏で、雪の中谷宇吉郎博士と血縁の人である。中谷氏はかつて東宝の助監督をしていた時分、女優だったいまの奥さんと知りあい、結婚して田舎に帰つてきた。これはすべて大分県観光課長の加藤正敏氏からきいた話である。なぜ二人が映画を捨てて宿屋のおやじとおかみに納まつたのか、こんなことは審つまびらかにする必要はない。私にはこの夫婦の物腰が氣持よかつた。だいたい小説を書くのをなりわいに行っている人種は、対象を見ていないようで実は正確に視ているものである。視ていると、この夫婦にはまったくごまかしがないのである。どんな一流の宿屋でも、客あつかいには必ずごまかしがあるものだが、この夫婦にはまったくそれが見られなかつた。したがって夕食の山家料理にも、一点のごまかしもなかつた。宿屋の食事で見ただけ真心のこもった夕食にであつたのははじめてであつた。同行は向井潤吉、林忠彦氏に「旅」の編集長の藤原進氏で、林氏はこの宿が氣にいつてしばしば利用しているとのことだった。奥さんが私達の酒席をそれとなく采配さいはいしているのに、あるじは遠慮して出てこなかつた。そこで林氏が、あるじをこの席に、とよんだ。

私はこの夫婦をそれとなく視て、なんだろう、と考えた。都会生活を経験してきた二人である。宿屋の亭主とおかみという柄ではない。奥さんは岐阜出身だとのことだった。すでに子供が二人

いるという。私は酒を酌み手料理を賞味しながら、ああ、ここにはたしかに伝統と過去がある、と肌で感じた。煮た野菜のひとつ、それを盛った器のひとつひとつに、実になんでもない伝統と過去が秘められていた。この夫婦がいかなる紆余曲折を経て宿屋の亭主とおかみに納まったか、そんなことはいくら穿鑿しても無益なことである。夕食をとったのは、宿の庭にある湯の岳庵という別棟である。とかく民芸風の家で民芸茶碗で食事を売物にしているところは、なんとはなしにいやらしい雰囲気（ふんいき）が漂っているものだが、ここにはそうしたものがひとかけらも感じられなかった。庭なども草がしげったままだし、そこを水が流れており、自然がそのままいかされているのである。つくりものがまったくない。豊かな湧水（わきみづ）と湯、そして植木屋が入らない庭、ここでは実にたくさんの言葉が省略されていた。

そして、食膳にならぶ皿のひとつひとつに説明がついていないのである。東京あたりで、たまに素朴な料理がだされると、かならず説明がつく。これはこの家の自慢料理です、と言う。うまかったためしがない。本当においしいものをこしらえたのなら、いちいち客に自慢する必要はない。だまってならべ、客がだまってたべてくれればよいのである。まずいと思った客は二度とこないだろう。うまいと思った客は、再び、だまってそのものを食べにくるだろう。

岩波書店発行の〈図書〉の十月号に、湯川秀樹氏がつぎのような随筆を書いている。すこしながいがここに書きうつそう。